

新学習指導要領に対応した授業作りの工夫 (4)

－新しい教科書への対応と小中連携を考えた入門期指導の転換－

1. はじめに

大正 12(1923) 年に H.E. パーマーが本校を「オーラル・メソッド」の実践校として以来、その指導法を脈々と受け継いできた本校英語科は、平成 7 年度に現在の 4 人のうちの 3 人がそろったところで新たな局面を迎えた。以来、平成 8 年度には「育てたい生徒像」(①「生きたことば」でコミュニケーションができる生徒、②困難に対して臨機応変に粘り強く取り組める生徒)を設定し、平成 8～11 年度には「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の 3 年間の指導計画を作成し、平成 12～15 年度には「自立した学習者」を育てるための 4 つの要素 (①授業、②家庭学習、③授業以外での良質な input、④英語を使った独自の楽しみ)を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案し、平成 16～18 年度には入門期指導のあり方と具体的な指導内容を提案した。また、平成 17 年度に現在の 4 人の体制になってからは小学校と高校における英語学習との連携を意識した中学校の英語学習指導のあり方を議論しはじめ、平成 19 年度にはその具体的指導事項を提案した。

上記のように、本校英語科は時代の要請によるものだけでなく、英語教育において恒久的に追究されるべき内容を研究してきた。そして、英語科教師全員のコンセンサスを得て、授業を含めた学習指導全般においてそれらの共同実践を行い、その成果を教科として毎年研究協議会で発表するとともに、各個人が日本全国で行われる研修会や学会等でも発表してきた。

2. 本年度研究テーマ設定の理由

平成 24 年度より施行される新中学校学習指導要領では、授業時数が 3 時間から 4 時間に増えることに伴って増加する言語材料や言語活動をどのように扱うか、4 技能を総合的に育成するための統合的な活動をどのように設定するか、より正確な理解力と表現力を身につけさせるにはどのような指導が必要か、そして新たに導入される小学校の外国語活動で学んだ内容をいかに着実な知識や技能として定着させるか等が求められている。それを受けて、本校英語科では平成 20 年度より「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに掲げ、同年度には 4 技能を総合的に育成するための統合的な活動の例を含めた 3 年間の授業作りの工夫 (① 1 年生に対する 4 技能の総合的育成を行うための指導、② 2 年生以降の「読むこと」を中心とした統合的活動、③「聞くこと」「話すこと」「書くこと」を統合的に使用した言語活動)について提案し、平成 21 年度は前年度に紹介しきれなかった指導内容を再提案し、新学習指導要領の完全実施に向けて本校英語科として見直さなければならないカリキュラム編成上の課題 (①小学校英語を活動を経験した生徒に対する実質的な入門期指導の再構成、② 3 年後の生徒の姿を見据えた指導カリキュラムの再構成)を明らかにした。そして、昨年度は特に入門期指導に焦点をあてて他の中学校でも実践できる指導内容とそれを支える指導理念について提案した。

このような中で、本校では来年度から使用する新しい教科書の選定作業 (本校は独自に教科書の選定ができる)を機会に、最終的な候補にあがった数社の教科書における題材や文法

事項の扱い、全体の分量についての簡易な調査を行った。そして、その過程で、本校だけでなくそれらの教科書を使うすべての学校において課題となるであろうことが見えてきた。一方、本校生徒の3分の2を占める附属小学校出身の生徒たちは、平成21年度より3年生から英語科専科の教師による外国語活動の指導を週1時間受けて中学校に入ってくるようになっており、平成25年度からは4年間の英語学習の経験を持った生徒を受け入れることになっている（すなわち本年度1年生は2年間の経験を持っている）。その影響はすでに現れており、パーマー以来90年近く行ってきた英語学習未経験者を対象とした入門期指導のカリキュラムを転換せざるをえなくなり、生徒の実態を見ながら毎年のように指導内容や指導方法に変更を加えている。このことは、来年度以降は全国の中学校でも必要であろうと予想されることである。

以上のようなことから、本年度は来年度より完全実施となる新学習指導要領下で使用される教科書を授業でどのように扱ったらいいのかということや、最低1年間の週1時間の外国語学習を経験して中学校に入ってくる全ての新生生に対してどのような入門期指導を行っていったらいいのかということを提案することにした。

3. 新学習指導要領下における検定教科書の扱い

来年度から完全実施される中学校学習指導要領の英語科検定教科書に関する改訂点は主に、3学年を通して週3時間から4時間授業になる、扱われる語彙が900語から1200語に増加する、「理解にとどめる」などの「歯止め規定」が撤廃される、などである。これを受けて編集された新教科書を現行版と比較し、授業で扱う際の留意点をいくつか述べる。

(1) 量の増加への対応

まず新版で目につくのはページ数の増加、そして各ページに出ている英文や単語の数の多さである。本校で使用している *ONE WORLD English Course* (教育出版) で比較してみたところ、いずれも10～20%程度ずつ増加しており、活動やまとめのページも多く、なかなかのボリュームがある。

例えば、同教科書で中2の未来表現を扱っている課を比較してみた結果が表1である。セクション数が1つ増え、新たな文法事項として *want to* ～も含まれている。ターゲット文の増加は否定文や疑問文も含まれたことによる。新出単語の増加はセクション数の増加によるもので、1セクションに出てくる新出語の数にあまり差は見られなかった。大きく異なるのは文や単語の総数で、セクション数を同じにして比べても文は7%、単語は28%の増加、新たに加わったセクションも含めれば文は56%、単語に至っては79%も増えており、かなりの量である。なお、これらの傾向は程度の差こそあれ、他社の教科書にも見られる。図1に表1で比較した新旧版のページをそれぞれ一部ずつ示す。

表1 *ONE WORLD 2* の未来表現の課を用いた新旧版の比較

	新版	現行版	増加率
セクション数	4	3	33%
ターゲット文数	7	5	40%
総文数	42 (29)	27	56% (7%)
新出単語数	30 (22)	25	20% (-12%)
総単語数	253 (180)	141	79% (28%)

(括弧内は新たに加わった *want to* ～のセクションを除いた3セクションのみの比較)

〈新版〉



Lesson 3
Part 3

自分の予定を説明することができます

真夏で、アパチが夏休みであることを話しています。

Bob: I'm going to relax all summer!
Aya: But Bob, every teacher will give us homework.
Bob: Every teacher?
Kenta: Yes, but it won't take a lot of time.

Bob: I'll need help with my Japanese homework.
Aya: Don't worry. I'll help you.
Kenta: I'm going to finish my homework in two weeks!
Aya: Oh, Kenta, you said that last year!
Kenta: Well, this year will be different.

Every teacher **will** give us homework. The homework **won't** take a lot of time.
「～するでしょう」「～しないでしょう」と予想する<math>will</math>「～する?」「～しない?」を教えます。

ここでの**will**は「～するでしょう、～するでしょう」の意味で、**can**「～できる」と同じように、あとには「(動詞の原形)」がきます。

I'll help you. (I **will**) は「～するつもりだ」という意思を表します。

Activity

1 Jimが今年の夏休みの計画を予想しています。英語を聞いて、Jimが何をつらがるテーマ名をここで書こう。

エレファンク vs. ジャークス
スノークス vs. ランダクス

2 表に合わせて、明日の天気を手紙しよう。

1 snow / Sapporo 2 sunny / Osaka 3 cloudy / Kyoto 4 rainy / Naha

例 It will be snowy in Sapporo tomorrow.

relax [rɪlæks]
will [wɪl, wəl]
think [θɪŋk]
won't [wɒnt]
+ will not
I'll = I will
I'll need help with my homework.
homework [həʊm.wɜ:k]
job [dʒɒb]
problem [prɒbləm]

〈旧版〉

Lesson 2

未来のことについて説明することができます

アチが作られたロボットを動かしたときの様子は、動画のロケットに興味をもります。

Ryo: This is our robot, Teshimo.
It will be two years old next month.
Mish: Does it talk?
Ryo: Not yet, but hopefully it will in the future. That's my dream.

Mish: Is it ready for the contest?
Ryo: Yesterday the gears weren't working, so we took them off and fixed them. Teshimo will work well today, I hope.




Teshimo **will** be two years old next month. Teshimo **will** work well.
Does it talk? --- Not yet. まだまだ。
~, I hope. ~だと思います(期待を込めて)。

ここでの**will**は「～するでしょう、～するでしょう」の意味で、**can**「～できる」と同じように、あとには「(動詞の原形)」がきます。

リスム(2) 動画の音がりに注意して見直しよう。
radio in America live in part in a video of

will [wɪl, wəl]
yet [jet]
hopefully [həʊpəfəli]
future [ˈfju:tʃə]
dream [dri:m]
working [ˈwɜ:kɪŋ]
gears [gɜ:z]
fixed [fɪksɪd]
hope [həʊp]
myself [maɪself]
video [vɪdiəʊ]
wasn't / were not in the future
take off

Activity

それぞれの人物の10年後についての英語を聞いて、その内容が絵とあっている絵カードを、選んでいばいば(1)に記入しよう。

1 Mary 2 Paul 3 4 Lisa

上の人物の10年後を、英語で書いてみよう。

図1 ONE WORLD 2のbe going to～を扱ったページの新旧版の比較

既に現行版を用いて週4時間英語授業を行っている学校も多く、従来と同じように授業をしていては、教科書をこなさきれなくなる恐れがある。今回の改訂では、従来の「全員が少ない量を完全にマスターすること」よりも、「とにかく多くの量に繰り返し触れること」に、より重点を置いているように感じられる。従って、授業を行う際にも、本文を一文ずつ逐語訳しながら理解に時間をかけるより、例えば Oral introduction/interaction で本文をわかりやすく導入して時間を工面するなどの工夫が求められるだろう。また、繰り返しのインプットを確保するために、新出単語・熟語や文法などは、その前後で自然なシチュエーションで teacher talk に積極的に取り入れたい。そのためにも教員が授業を英語で進める割合を高めることがますます肝要になる。

その他にも、活動を扱う箇所や文法のまとめのページも増えた。ここでは accuracy と fluency の両方をバランスよく伸ばすことが求められていると思われる。新たな活動を設けるよりも、教科書の活動によく目を通し、生徒の達成度に応じて授業に取り入れ、分量が増えたことにより広がった、使える表現の幅を最大限利用させ、定着につなげたい。

辞書の使い方を扱うページも多くなった。英語の世界は教科書本文の中だけでないと生徒に気付かせ、教科書以外のものも自力で読めるようになることを期待してのことであろう。サイドリーダーや新聞・雑誌など、教科書以外の教材を柔軟に活用したい。

(2) 文法・文型配列の変更への対応

新版教科書では、文法・文型の配列に大きな変更があったものも多い。上述の *ONE WORLD* で例を挙げると、①不規則動詞や be 動詞も含め、過去形はすべて中1で扱われることになった、② There is/are ~の文は中2の後半だったが、中2の始めに繰り上がった、③受動態が中3始めから中2後半に繰り上がった、④ to 不定詞を1つの課で全て扱うのではなく、用法ごとに中2・3にまたがって分散させた、などである。

従来も言われてきたことだが、教員が早いうちに、3年間の教科書をよく読みこみ、新出文法や語彙がどのように配列されているか、きちんと知っていることが不可欠である。これは題材や登場人物たちに精通することにも役立ち、(1)で述べた Oral introduction / interaction や teacher talk にも大いに活用できる。

(3) 小学校外国語活動への対応

中1の全ての教科書で、本課に入る前の導入部分 (*ONE WORLD* では “Springboard” など、どの教科書もパート名がついている) が充実し、小学校での外国語活動必修化に対応したものになっている。この部分は何となく扱ったり、駆け足で済ませてしまうのではなく、きちんと教員が読み込み、小学校から中学校への橋渡しをスムーズにする工夫をしなければならない (本校の実践例は4(2)に述べる)。当然教員は多くの小学校で用いられている「英語ノート」にも目を通しておく必要があるし、できれば小学校にも足を運んで授業参観し、小学生達の学びを実体験する機会を持つなど、小中連携を主体的にリードする立場でありたい。

同様のことが中高の連携にも当てはまる。高校の教科書に実際に触れ、授業を見ることが、小学校外国語活動に触れることと合わせ、中学3年間を見通し、長期的視野を持った指導につながると確信する。

4. 小学校での外国語活動実施を受けての入門期指導の修正

(1) 小学校外国語活動の影響と中学校の対応

① 小学校の外国語活動と中学校の役割

この10年間に現行の「総合的な学習の時間」に多くの小学校が英語活動を行ってきた。加えて本年度からは新学習指導要領のもと外国語活動が5年・6年で完全実施されている。外国語活動導入に際しては否定的な見方もあったが、制度として動き始めた以上、小学校での外国語活動を支援・協力し、小学校での英語体験をどのように生かせば、その後の中学校、高等学校での英語教育につなげていくことができるかを探り提言していくことが我々に当面課された仕事であろう。

外国語活動導入の検討・検証は今後も継続するべきだが、その際英語の内容だけに留まらず、外国語活動を導入したために小学校で削られたことがらや小学校全体の中で行われる教育活動全体のバランスなども含めて考えていかななくてはならない。たとえば小学校教員からは、「コミュニケーション能力の素地を養う」のは外国語活動だけの役割なのかといった疑問や意見を聞く。今後の実践の中で共に考えていきたい課題である。

② 「義務教育」という枠組みでとらえる流れ

このように児童・生徒を小学校・中学校といった校種で区切るのではなく、義務教育として預かっているととらえ、小中一貫の研究会に組織変更する地区が増えてきた。すなわち、「〇〇市小学校国語教育研究会」と「〇〇市中学校国語教育研究会」が合体して「〇〇市国語教育研究会」が組織され、同じ地区で教育する児童・生徒の9年間をよりきちんとした見通しを持って指導しようとする試みである。合同の研修会や授業参観だけでなく、人事交流の試みを行っている地区もある。

私立の中高一貫校が多く誕生しているのも、「中高6年間の見通しを持った教育」が今の時代にアピールするからではないだろうか。同じ発想で公立学校が義務教育の小中一貫を掲げることは大変に望ましいことだ。日本の教育を根底から支えている圧倒的多数の公立学校に新しい強みが生まれることになる。保護者にとっても、児童・生徒にとっても、この一貫性は頼もしいものとして歓迎されるだろう。

③ 英語に関して小中一貫を難しくしているもの

現時点で英語に関しては、小中一貫が難しい。従って、小中連携が研究会のテーマに掲げられることが多い。その主な要因を探ってみる。

1) 小学校に専任の教員がいない

現役のほとんどの小学校教師は当然のことながら英語を教える訓練を受けていない。また外国語活動は教科ではないので、英語を主専攻とした専任教員がいない。従って、小中連絡会議などでは、小学校の代表として他教科の教員が出席する。組織としては未成熟の段階といわざるを得ない。

2) 「英語ノート」が自己目的化している

全国で一斉に新たな活動を始めるのだから当然のことではあるが、一部では英語ノートの活動を順番に進めることが外国語活動であるかのように思われている節がうかがえる。小学校での活動の指針になるように作られた英語ノートには、英語活動に不慣れた教師を支援するために各地区の研究会が作った指導案の事例集だけでなく、市販の音声教材・映像教材やそれらを提示する電子黒板など授業を支援する教材教具が豊富に準備

されている。またALTとのチームティーチングも行えるように行政からの支援も厚い。しかし残念ながら現状は外国語活動がまだ定着しておらず、授業を行うことが精一杯の地域が多いように思われる。このこと自体途についたばかりの外国語活動であるので仕方ないことではあるが、せっかく一生懸命に取り組んでいる活動を中学校に引き継いでもらおうとか連携して接続を考えようとするゆとりが見られないことは残念だ。

具体的には英語ノート2の最後で扱う want to ... の表現を使って、英語で自分の夢を語ることが小学校でのゴールとして授業が流れていくように見える。もちろん「教科書の最終ページをゴールと設定し、そこに向かってバックワードで授業をデザインすること」は間違いではない。ここで指摘すべきは、英語ノートの終わりが中学校の入り口とどれほど距離があるかを考える小学校教師が少ないことだ。これは本来はカリキュラムの問題であるが、小学校現場が英語ノートに振り回されてしまっている感が否めない。

一方で自分たちの実情に合わせて独自のカリキュラムを開発する地域も増えている。英語ノートを教えるのでなく、英語ノートを活用して英語を教えることが肝要だと思う。

3) 何をどう変えて良いのかわからず、何も変えない中学校教師

中学校側にも問題は多い。「たかが週1時間で何ができるのか。英語は言語学習なので、反復練習が必要だ。週1回では何も積み上げられない」と中学校の入門期に修正を加えようとしないうち中学校教師が大多数である。

目の前の生徒の変化に対しても対応できていない部分が多い。かつては「入学時のキラキラした瞳が見られない」「既に英語嫌いになっている生徒がいる」などのマイナス面が指摘されることが多かった。しかし、実際には多くの児童が小学校で英語に触れ、心理的なハードルが低くなっただけでなく、単語レベルでは様々な英語運用力が付いているように見受けられる。残念ながらこのように変化した新しい新入生に対応できずにいるのが中学校の実態ではなかろうか。

④ 小中連携の要は中学校：それも入門期

以上挙げた要因から英語に関してはなかなか小中連携は実質的に進みにくいようである。だからこそ中学校が役割を自覚すべき時だと考える。今後英語ノートが改訂になって内容が変わったら、小学校と指導内容を検討し、外国語学習の時間をより充実させ、小学校での時間を無駄にせず、小学校の学びを生かして中学での学習を進展させることが当面の課題となろう。幸い小学校では文字や文法の指導ではなく音声による指導に重点が置かれて、英語の単語や音声に慣れ、音声で発表することが当然のような空気がある。この空気を生かした音声中心の入門期指導が期待される。また、多くの小学校で共通して導入されている項目に着目する必要がある。たとえば、挨拶、自分の名前を言う、自分の好きなものを言うことなどである。Nice to meet you. My name is I like Do you like ...? などについては、本校でも導入時にすぐに大きな返答が返り、小学校における活動の定着の高さを伺わせた。加えて小学校でよく紹介される名詞としては、机や本など身近な物の名前、数字、身体の部分、色、野菜・果物などの食べ物、曜日などがあげられる。

中学校教師としては、このような生徒の学びを生かし、今までできなかったことを実現可能にさせたい。そのためには、次の項目で述べる入門期での活動をどのように修正するかが鍵となる。

(2) 本校入門期指導の修正

長い間ほとんどの生徒にとって、中学入学時点が英語学習入門時期であった。現在でも小学校で行っているのは英語の「教科」ではない。しかし、知識や経験の全くない所に始める学習を入門期と呼ぶならば、もはや中学校入学時は英語入門期ではなく、小学校から中学校への「橋渡し期」とでも言うべきかもしれない。その一方で、ここからは教科としての英語の「学習」が始まる、という心構えを教えるという意味で新たなスタート感を演出する必要は今まで以上にある。実際の所、体系化されていない先行体験を、整理した形で今後につなげていかなければならず、そのような体系化に関しては今まで同様に一からの積み上げとなる。

このようなことを勘案して本校の「入門期指導」の見直しを行った。その際大きく分けて以下の3つの点に留意した。

ア) 「英語はまず音声から」という小学校での指導と生徒の意識を引き継ぐ。

本校ではもともと音声で理解できてこそ読み書きの技能も育つ、という考えの下に教科書に入る以前に音声のみで指導する入門期間を置き、学年が上がっても音声先行の授業を行っている。したがってこのア)に関しては、本校の従来の方針を変えずに行えばよい。

イ) 小学校と重なる内容を扱っても、中学校らしい正確さを要求してレベルを上げる。

中学校入門期には小学校で馴染んだような簡単な語彙や表現を当然扱う。新教科書ではじめに置かれている Springboard (*One World*), Warm-up (*New Horizon*) のような課の内容がそれである。しかし生徒は小学校では、正確なプロダクションを求められてきてはいない。中学校では今後きちんとした文を言えるようにすることにつなげるため、英語らしい発音、口の動かし方にも注意を一層向けさせて指導するようにしている。また、似たような題材を扱っても、単語だけの返答でなく、文の形で返答させるなどが、中学校の入門期で意識して行っていることである。

ウ) 小学校で体験してきた語彙や表現の紹介・練習にかける時間を短縮し、その分「書くこと」や文法に従来より時間を割く。

ア)、イ) で述べたように、小学校の英語活動が始まっても本校は今まで重要視してきた入門期の内容を大きく変える必要はなかった。しかし小学校での先行体験は確かに生徒の中に蓄積されていることを考えると、それを受けての指導が今までと全く同じで良いはずはない。平成19年度と平成23年度の入門期の実施ペースを比較すると、大きな違いとして文字を書き始める時期や、既習表現を文字で見ると時期を早めていることがよくわかる(表2、表3)。しかし、夏休み前までに教科書の3課までを扱うという点に変更していない。つまり小学校の貯金分を短縮して、替わりに行うべきなのは秋以降に扱う文法の前倒しではない。では何か。まずイ) に述べたように、題材は小学校と重なっていても、正確ですばやい反応をトレーニングすることもその一つであるが、さらにウ) として生徒が最もつまづきやすい所にていねいに手をかけ、秋以降のステップの準備をさせることが修正の柱である。彼らが最もつまづきやすい所、最も差が開いてしまう所はどこか。それは「書くこと」と文構造の理解である。この2つの点「書くこと」と文構造の理解に関して、ていねいな扱い方を次章以降に詳述する。

表2 平成19年度入門期指導内容

時数	日付	口頭練習 (聞くこと・話すこと)		読むこと・書くこと		
		文型・文法	語彙 (含: 発音指導)	文字 (単語・文)		教科書
				読む	書く	
1	4/13	オリエンテーション1 (約束事, 持ち物, なぜ英語?, 母語のペアワーク, コミュニケーションの成立条件) How many? ..., please. Thank you. You're welcome.				
2	4/16	オリエンテーション2 (自立した学習者, 4技能の学習順序, 授業で力をつけるコツ, 家庭学習の方法)				
3	4/17	オリエンテーション3 (挨拶, 先生の呼び方, テープレコーダーの使い方, 家庭学習記録の書き方)				
4	4/19		出席の返事 Here. 数字 0-20 「私の部屋」			
5	4/20	My/Your ~ Your/My ~? Yes/No, your/my ~.	数字 21-100, ~ 999 電話番号 古典 ABC の歌	大文字の名前		
6	4/23	復習 Aural Perception Test	watch, bag, umbrella, pencil case	大文字の名前		
7	4/24	- 's ~? Yes, his/her ~. No, - 's ~.	新 ABC の歌	小文字の名前		
8	4/26	My name is ~. Nice to meet you. 聞き取れない時の聞き返し方	足し算・引き算	小文字の名前		
9	4/27	This is my/your ~. That is my/your ~.	歌 (7 steps)			
10	5/1	Is this/that your ~? Yes, it is./No, it is not.	台所・ダイニング・洗面 所	文字の音①: 破裂 音		
11	5/7	Is this/that your ~? Yes, it is. It is my ~. No, it is not. It is not my ~.	野菜とくだもの	文字の音②: 摩擦 音		
12	5/8	Is this/that your ~? No, it is not. It is not my ~. It is - 's ~.	動物と乗り物	文字の音③: その 他の子音	大文字を書く (プリント)	
13	5/10	復習	アブク (abc) song	文字の音④: 母音	大文字を書く (ペンマン)	
14	5/14	This/That is a/an ~.	音楽室と理科室		大文字を書く (ノート)	
15	5/15	Is this/that a/an ~? Yes, it is./No, it is not.			小文字を書く (ペンマン)	
16	5/17	What is this/that? It is a/an ~.	動物		小文字を書く (ノート)	
17	5/18	復習			文字を書く (ペンマン)	
18	5/21	Is this A or B? It is B.	アルファベットチャンツ① スポーツ		文字を書く (ノート)	
19	5/22	This is - . He/She is ~.	家族や親類 顔と骨格の部位	アルファベット チャンツ②綴りを 読んでみる		
20	5/24			アルファベット チャンツ③綴りの 読み方を学ぶ	文字を速く丁寧 に書く	
21	5/28			アルファベット チャンツ④綴りを 読む	プリントに単語 を写す	
22	5/29	Who is this/that? It is - . He/She is ~.	学校でレッツスタディー		ノートに単語 を写す	
23	5/31	I am ~. We/You/They are ~ s.	名詞の複数形			
24	6/1	his/her ~.			ペンマンの単語 を書く	
25	6/4	I like ~.	色	既習表現を読む①:		
26	6/5	去年のテストを解く				
27	6/8	復習		既習表現を読む②:		
	6/13	前期中間考査				

表3 平成23年度入門期指導内容

時数	日付	口頭練習（聞くこと・話すこと）		読むこと・書くこと			
		文型・文法	語彙 (含：発音指導)	文字（単語・文）		教科書	
				読む	書く		読む
1	4/15	授業びらき 期待を持たせ、これからの姿勢を指導する。教師の顔を見て大きな声を出す姿勢。実態調査。最低限の挨拶。出欠。記録のつけ方。復習できるような内容。	Mr.Ms.Yes. Here you are. Thank you.You're welcome.				
2	4/18	・テープレコーダの使い方。挨拶さらに。記録 どうかな、復習したかな。	数字 身の回りの物				
3	4/19	My/Your ～ Yes, No, 応答	数字 11 ～ 21 身の周りの物				
4	4/21	～'s, his, her,, 応答		大文字の名前・ ABCソング	鉛筆の持ち方		
5	4/22	This is my ～, That is my ～	顔や体の部分		大文字を書く		
6	4/25	Is this your ～? Yes, it is. No, it isn't.		小文字の名前			
7	4/28	ロングアンサー	曜日・曜日の歌		小文字を書く		
8	5/2	復習		文字が表す音（子音）			
9	5/6	Whose book is this? It is ～.	教室にある物	文字が表す音（母音）			
10	5/9	This is a ～.	動物	単語を見よう			
11	5/10	Is this a ～?	台所にあるもの				
12	5/12	What is this? It is a ～.					
13	5/16	This is ～. He is my classmate.					
14	5/17	人物についての応答	家族		フォニックス通りの 単語を書く		
15	5/19	Yes, he is. No, she isn't.	教科名				
16	5/20	Mr. Kaneko is a science teacher.			単語の視写の仕方 曜日のつづり等		
17	5/23	復習	色		ノートに単語を書く。		
18	5/24	複数形					
19	5/26	I am ～, You are ～,	スポーツ	既習表現を読む			
20	5/30	Are you ～? Yes, I am.	果物・食べ物				
21	5/31	They are science teachers.	teacher, student				
22	6/2	I like yellow.					
23	6/3	Do you like yellow? Yes, I do. No, I don't.					
24	6/6	教科書の内容 / from ～ Call me Aki.			文の書き方・写し方	L1	
25	6/7	実技テスト 今までにやってきたこと					
26	6/9	教科書の内容 / 縮約形 I'm				L2	
27	6/10	昨年度の中間テストをやってみる					
28	6/13	応答 復習				L2	
29	6/14	応答 復習					
		前期中間考査					

①「書くこと」のていねいな指導

<文字を書くことの指導>

アルファベットはどの生徒も知っているが、きちんと大文字、小文字を紹介し、各文字の名前の発音も、いい加減にならないように教える。小文字導入の際に「大文字と小文字はどちらが先にできたと思うか」と問いかけ、大文字とかなり形が異なる小文字も、その大文字との関係性を意識させる。

文字を書く練習は、形を知っているだけにいい加減になりやすい。ていねいに書かせるために次のような工夫をしている。

まず、姿勢に注意させる。机の上をかたづける、背筋を伸ばす、利き手でない方の手もきちんと出して、ノートを押さえる、足の裏を床につける、なるべく下敷きをきちんと使うなどが留意点である。そして、正しい鉛筆の持ち方と、よくある良くない持ち方を示した図をプリントで渡し、自分の持ち方を意識させる。

また単純にAから書かせるのではなく、順序を工夫することも効果がある。

例1) 大文字の場合：文字を構成している線に着目する。

- ① 縦横の線からできている文字 (E, F, H, I, L, T)
- ② 斜めの線も使ってできている文字 (A, K, M, N, V, W, X, Y, Z)
- ③ 円(弧)からできている文字 (O, C, G, Q, S),
- ④ 曲線と直線からできている文字 (B, D, J, P, R, U)

書きやすさの順に①から指導してもよいし、むしろ円を使う③から始めてきれいに書くのは意外に難しい、と感じさせる方法もある。

例2) 小文字の場合：大文字からの形の変化が小さいものから大きいものの順に扱う。

例3) 小文字の場合：第2線と第3線の間に入る字、第1線までの高さを持つ字、基線の下まで突き抜ける字、のように分けて扱う。

ペンマンシップはただ渡してもいいかげんになぞる生徒が多い。本年度はあえてなぞらせなかった。書く回数は少なくし、1回書いた所でよく手本と見比べるという使い方をさせた。

ノートは罫の太いノートを使わせることが非常に大切である。よく売られている英習用の4線ノートは、1頁に13段か15段入っている。しかし、これらでは罫が細すぎて、字形に気を配ることができない。本校では、B5判型の中に4線が8段しか入っていない「8段ノート」を一人2冊学校で購入し配布する。これだけ太い罫で書くにごまかして書くことができない。

次に、4線ノートでなく大学ノートのような普通の罫のノートへの書き方、すなわち1本の線の上への書き方を指導する。日本の文字は中心をそろえて書くのに対して、アルファベットの文字は基線を基に、下の線をそろえて書かれる。しかしながら、普通4線のノートで学習がスタートした後、これを1本の線の上に書かせる指導はほとんどされない。何の指導もないのに、各種の問題集やテストの解答欄などに4線はなくなる。その結果基線より下に突き抜けるべきyやgが線の上に乗ってしまったりしている。1本の線の上はどう書かせるかは、1年生のうちに指導すべきである。本校では、2冊の4線ノートを使い切った後は、4線でなく大学ノートを買わせている。

大学ノートはB罫(幅6mm)でなく、やや罫の太いA罫(幅7mm)を買うように指

示する。最近ではA罫よりも太いU罫（幅8mm）、UL罫（幅10mm）等も売られているので、できればより太いものにさせる。いずれもダブルスペース（1行おき）に書かせ、とにかく基線にあたる下の線を意識してそろえることを強調する。

初めての定期テストを終えた後には、ペンマンシップに載っているブロック体とはやや異なる書体のバリエーションを紹介することが多い。

かねてから不思議でならないのは、日本のペンマンシップのほとんどが、正円を基本としたブロック体といわゆる「筆記体」の2つの書体しか載せていないことである。「筆記体」は100年も前の書体で実用的でない、とはよく言われるが、あの正円の方の書体も律儀に使い続けることは難しい。基本の形を教えた後にバリエーションとして、実用的なやや幅の細い書体やおよび少し右に傾いたイタリック体を紹介した。見た目も美しいイタリック体を気に入って教師よりきれいに書く器用な生徒も多くいる。さらにイタリック体の利点として、文字と文字とがいつもつながっているわけではないが、自然なハネやつながりはあるので、「筆記体」を学ぶ際に繋ぎの線なのか本来の文字の線なのかを意識しやすくなることもある「図2に生徒が実際に書いた文字の例をあげる」。

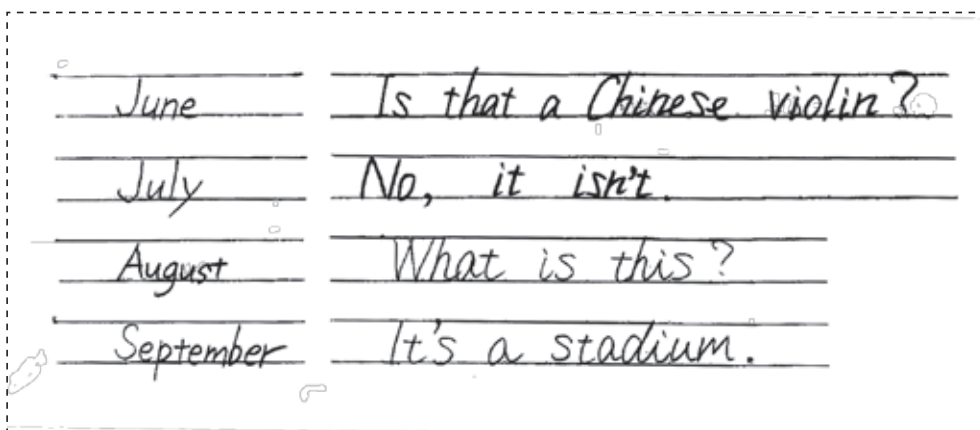


図2 生徒が実際に書いた文字の例（一部）

<単語を書くことの指導>

本校の入門期ではフォニックスの基本を扱う。内容は、アルファベットの文字は音を表していること、子音字が表す音、a,e,i,o,uの5つの母音字が表す2通りの音である。さらに他のルールまで紹介する年もあるが、本年度はこれだけで単語に入っていった。

単語を初めて書く（写す、視写する）時には、その方法をしっかり教える。すなわち、まず個々の文字が表す音を意識しながらゆっくりと読む。2度ほどくり返した後、単語を書いている間は見返さずに一気に、音を言いながら書く。書いた後つづりを確かめる。

ただ「写しなさい」というと、フォニックスの意識は飛び、適当に2,3文字ずつ見て写してしまいかねないが、これによってその後の単語のつづりも憶えやすくなる。

<文を書くことの指導>

口頭でなら、いくつもの文をすでに言えているので、単語が書ければ文をどんどん書いていくことができる。文を視写する際も単語同様に、なるべくまとめて覚えて書くように

言う。単語と単語の間隔や行の変え方（単語の途中で変えない）なども指導項目である。できるだけ机間巡視して、指導したい場面である。

<ノートの指導>

本校のノート指導は、板書はここに、家庭学習はここに、という決まった形はない。しかし教科書の理解と音読が済んだページは、再生用の問題として、訳をプリントで配っており、それを見れば英文が書けるという状態になるまで練習し、さらに自分でテストするように指示している。ややもすると生徒はテストをせずに、ただ本文を写すだけで勉強したつもりになりがちである。もちろんはじめは写すことも大いに勉強になるが、コピーイングは往々にして単に手を動かしているだけになってしまう。間違いを赤で直しているノートを大いにほめ、自分でテストする方法を推奨している。

家庭学習を促すために、音読や基礎英語の聴取、ノートへの書きができたかを1週間分記入する表を月曜日にノートに書くように指導している。そして毎時間ではないが、折りに触れてノートの書きぶりはチェックする。ただノートを埋めるのではなく、どのような方法であれば自分に力がつくのか考えさせていきたい。例えばどの語も同じ回数練習するのではなく、難しいもののみ練習する、などの工夫をしている生徒の例は積極的に紹介するようにしている。

② 文構造の理解を意識した指導

1年の7月まででbe動詞の文も一般動詞の文も出そろおうが、口頭だけの指導期間を長めにとっている本校では、二つのタイプの文を一般化して腑に落ちる所までは導ききれない面があった。修正入門期ではこれを重くみて、かなり明示的に文構造を理解させるように努めた。

まず、先にも述べたように、口頭練習の内容を文字で見せ始める時期を早めた。自分が口頭で言えることでも、文字と共に頭に入っていないと構造的な理解になかなか結びつかないからである。ナイストゥミーチュウがサラッとさえ、ドゥウウライクがサラッとさえでも、どこが置き換え可能な場所なのかがわからなければその後、文を生成していくことはできない。また、文字を見せずにWhoseとWho isを混乱なく指導することは難しい。

言えることを文字でも見て認識させた後、整理して示すべき最も重要な文法は、1つの文に「動詞」が一つだけあること、その「動詞」がbe動詞の場合と一般動詞の場合では疑問文、否定文の作り方が異なることである。主部と述部をどの文でも正確に指摘することができ、述部の中の動詞を指し示すことができるかどうかは、文の訳を書くことよりもずっと重要である。

そこで、黒板に人が頭を左にして寝ている図を書き、頭は主部、胴体は述部とわかるように視覚化してみた(図3)。そして「胴体の中に必ず一つ心臓があるように、文にも必ず一つ動詞がある」と説明した。主部と述部があることは、どの生徒も大体わかっているであろうが、この図を示すことで、be動詞を日本語の助詞「～は」と捉えないようにした。また頭となる主部は必ずしも1語ではないことにも気づかせた。それは後に長い主部が出てきた時に主部と動詞を確実に意識させるためには、初期の構造把握は重要であると考えたからである。

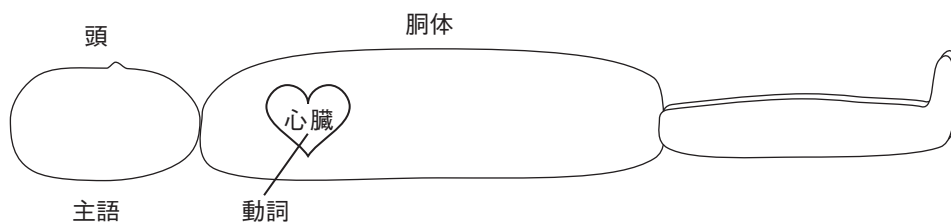


図3 英文の構造を表す図

5 まとめと課題

本年はメインテーマ「新学習指導要領を見据えた指導」の4年次として「新しい教科書への対応と小中連携を考えた入門期の転換」をサブテーマに掲げて研究を進めてきた。初めてこのメインテーマを掲げた3年前は、新学習指導要領によって何が変わるのかということが漠然とした想像の域を脱していなかったが、すでに動き出した小学校外国語活動の経験を持つ生徒を受け入れるようになり、新しい教科書を実際にこの目で見てその変化を知るに至って、より現実的な問題点とこれからの課題が明確に見えて来た。それぞれについては3, 4に詳しく書かれているが、それらを一言で表すならば「既製の概念を捨て、実情に合ったカリキュラムと指導法を編み出す必要がある」ということである。そこで、ここではそのことをふまえて今後私たち中学校教師が何を考え、何を実行していかなければいけないのかを、本校英語科が議論を進めていく中で出てきたことばをキーワードにしてまとめる。

(1) 「教科書が終わらない！」

これは来年度から使用する教科書を選定する作業の過程で見えてきたことである。もちろん、前回の学習指導要領が「ゆとりの教育」を旗印に教育内容を一律に約30%削減したものを、元に戻しさらに深化させることが新指導要領のねらいの1つであったことはわかっていたが、実際に各社から出された教科書を見ると、今までどおりの授業をしていたのでは教科書の内容を指導しきれないであろうということが現実味を帯びてきた。特に、教科書の本文を重箱の隅をつつくように念入りに扱うことで「自分はしっかり指導した」と思いこんでいる教師ほどこの問題に突き当たると思われ、そのつけは必ず生徒に回されることになる。新指導要領完全実施の初年度から理想的なカリキュラムを組むということは難しいが、常に自分の生徒の実態を確認しつつ、既成概念にとらわれない指導法を探っていく必要があるであろう。

(2) 「もはや『入門期』ではない？」

これは本校の入門期指導をどのように改善していったらいいかを議論しているうちに出てきた発想である。これまでも英語学習は学校だけで行われているものではないという認識はあったが、小学校の外国語活動を受けた経験のある生徒を実際に指導してみると、90年近く前から音声を中心とした入門期の指導法が確立されていた本校でさえ、その指導内容を大きく変えなければならないという事態に直面している。もはや、「入門期」は小学校の外国語活動がそれにあたるものになり、中学校における従来からの入門期は「橋渡し期」ととらえる必要があるのではないかという考え方が出てきた。もちろん、英語を教科として学ぶための「入門期」というとらえ方はできるが、これまでどおりの指導内容では生徒を満足させられないばかりか、下手をすると外国語活動を経てきた生徒をつぶしてし

まうことになりかねない（実際に研究指定校の中にそういう例を見かける）。したがって、目の前にいる生徒たちに何を指導したらいいのかということをしつかりと見極める目とそれをどのように実際の指導に生かしていくかという行動力が求められるであろう。

(3) 『『態度』から『技能』へ』

小学校の外国語活動の目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」である。そこで、一般的に小学校では「技能ではなく態度を養う」と解釈されており、教科ではないこともあって技能を習得することは表向きは「御法度」とされている。確かに週に一度の授業では技能を身につけさせるのは難しいというのが中学校教師の見解であろうが、小学校の先生方は「週に一度でも授業をやっているのだから、どんな力がついているのか知りたい」という保護者からのプレッシャーに悩みつつ指導しているという。以前は本校でも「小学校では英語の勉強が楽しいと思うような指導をしてほしい」という漠然とした希望を述べているだけであり、「下手に技能の指導をすることは中学校の指導を混乱させる」と言い切っていた。しかし、先述したとおりに単語やフレーズを丸覚えするというレベルではそれなりの知識を得て入学してきている生徒を目の当たりにすると、果たして小学校における指導は態度の育成だけでいいのかという疑問がわいてきているのも確かである。

本学には「四校研」という小・中・高・大の教員が集まって小中高の一貫カリキュラムを作ることを目指す研究活動があるが、そこである高校の教員から次のようなアイデアが提案されたことがある。

「例えば、『チョコレートをください』ということを小学校では *Chocolate, please./ Give me chocolate.* 中学校では *Can you give me some chocolate?* 高校では *Would you mind giving me some chocolate?* のように *politeness* の段階のちがいがいいという技能の達成目標を設定できないだろうか？」

このアイデアは、今後の小中連携及び中高連携のカリキュラムを考える上で1つの重要な考え方ではないかと思われる。特に、小学校でどこまでできるようになることが目標なのかということが示されていない現状を改善する方向性として、中学校側から提案できることではないであろうか。

参考文献

- 樋口忠彦監修．(2006)．*ONE WORLD English Course 2*．教育出版．
松本茂他．(2011 検定済)．*ONE WORLD English Course 2*．教育出版．